

いのに『お母さん、水汲んでやるわね。』と言って汲んでくれるのですよ。他に何人も子どもが居ても水甕がからになっていても言いつけなければ誰も汲まないのに、ヒデ子だけですよ。」と申します。和尚さまはヒデ子ちゃんの心を知り、知能の優れた子を預かった方が良いと思ってしまった自分の心を反省しました。

みぞれのふる寒い夜更けのことです。「ヒデ子ちゃん きたない」と女の子の部屋では大騒ぎでした。びっくりして起きてきたお母さんにヒデ子ちゃんが言いました。「カヨちゃんがね おねしょをしてね 『おふんがつめたくてねむれない』って 泣いているからね わたしのからだは あったかいから かわかしてあげているの」ヒデ子ちゃんは冷たいおねしょのふとんに入ってカヨちゃんのかわりに寝てあげていたので。一緒に聞いていた和尚さまは、しっかりとヒデ子ちゃんを抱きしめて言いました。「ヒデ子ちゃんはきたない。きれいな きれいな ところをもった 仏さまだよ」

お不動さま

私は仏にならずとも
生きとし生けるものみなを
もろさず救い助けんと
誓う心ぞ仏なる

和尚さまは修証義の発願利生の歌を、生涯の誓願とされました。自らはさておいて、世のため人のために 尽くそうとする心を発すものこそ、衆生の慈父であります。

お不動さまはすべての人々がこの心を分かちて欲しいと、怖いお顔で私たちを見ておられます。その心を起こす人々を守って下さっています。でも、悲しげな眼差しも感じられます。それは、なかなか分かるうとしない人類への悲しみの眼差しでしょうか。

のーまくさんまんだー ばーざらだん せんだー
まーかろしやーだー そわたやうんたらたー かんまん

仏教法話

—心のひかり・人生のしるべ—

慈父



ノガミ：今から七十年ほど前、上野驛のことを子どもたちはこう言っていました。

このノガミに群れている子どもたちの姿を見て誰しも心を痛めぬものはありません。まことに賽の河原とはあの世のことではないのであります。何の罪もない子どもたちが悲しい戦争の為に親を失い、ノガミに群れ集まって食を求めてさまよう姿ほど哀れをもよおすものはありません。亡き父母を慕って泣いた涙も今は尽きて、拾った煙草を吸って歩く子等、手にカンツメの空きカンや蓋をさげて、ホームや待合室に捨てられた吸殻を拾い集めている子ども、それを再び巻きかえて売っている子ども、列車を待つ数千人の列の人々に食べ物をねだって歩く子ども、小さな麻袋で作った座布団を汽車を待つ人々に貸して料金を貰う仕事、靴磨き、新聞売り、そしてその子ども達が皆スリやカツパライをする。それは冷たい社会への無言の抗議でありましょうか。愛を忘れた動物の野生がその子ども達の第

二の性格となつて浮浪放縦な生活に慣れ、只生命あるものの生きようとす本能だけが可憐な魂を汚濁の淵へ追つてゆくのであります。夜ともなれば、地獄の鬼に責められる幼児のように、子ども達の群れは地下道の方へと追われて亡者の群れの中へねぐらを求めて行きます。そして浮浪児狩りのトラックで東京都の収容所へカリコマれて行くのです。こうしてこの現実の賽の河原には遂に地藏菩薩さまはゆるぎ出ては来られません。子ども達は永遠に戦争の犠牲者として社会悪の卵となり終わる運命にあります。

一切衆生皆是吾子

この子等の運命を憐れんだ和尚さまがおりました。全国の孤児総数は昭和二十三年二月一日の厚生省の調査によれば十二万百二十三名であります。全国には約八万の寺院がありました。もし全国のお寺で孤児一人ずつ引き受けて育てて下さるか、さもなければその檀信徒中に里親になつて下さる方を見つけて下さるならば、八万の孤児がたちどころにみ佛の慈悲の懐に救

われると、『一寺院一孤児運動』を提唱しました。そして、まず自分がやらなければと上野駅から三人の子どもを自坊につれて来ました。戦後の貧困が底をついた時代です。お粥をすすり、もろこしのふかしパンを食べさせたり、芋のつるまで入れたお雑炊や、お葉漬の水をお醤油代わりに使いました。奥様は「お嫁に来る前にはこんな仕事をするというお話はありませんでした。」と言いましたが「お経を読んでいるばかりが和尚ではない。み佛の大慈悲心は人みな吾が子であるという大きな愛である。この子ども達を吾が子として救い育てるのだ」と言い聞かせ励ましたのでした。

児童養護施設

和尚さまの志は社会に知れて、寺の庫裡を使った定員十名の児童養護施設になりました。奥様はどこかに施設を建てて、事業としてやってほしい、そんなに子どもを連れ込まれては困る、自分の子どももあること

ですからと希望したのですが「子どもの求めている愛情を満たしてやるには施設よりも家庭にまさるものはないのだから自分の子どもと一緒に育てなさい」と言い聞かせると、奥様は「親子水入らずということはなくなりましたね。」とため息を漏らしました。「施設の子どもを含めて親子水入らずにするのだ」と申しますと、「ご修行をなさった和尚さまと私はちがいます。私は凡人ですから」と泣かれたのです。一切衆生皆是れ吾が子のみ教えの通りに、和尚さまは奥様を子ども達に「お母さん」と呼ばせ、三人の子は施設の子と分け隔てなく一緒に育てました。

ヒデ子ちゃん

子ども達の中にヒデ子ちゃんがいきました。三年生ですがまだ字が読めません。学校にお願いして一年生の教室に入れてもらいました。でも、教室に入らないで滑り台やブランコで遊んでいました。ある日奥様が「ヒデ子は毎日学校から帰ると水甕すかめの水を言いつけもしな